

**多国間文化交流としての研修：シンガポール夏期大学報告書**  
**Stage comme échange culturel multilatéral : compte rendu de l'Université**  
**d'été francophone des pays d'Asie du Sud-Est**

西山教行

アジアにおいてフランス語は学問研究の対象にとどまるのだろうか。異文化間コミュニケーションの道具にはなりえないのだろうか。この課題に具体的に答えるかのように、第六回東南アジア夏期大学(Université d'été francophone des pays d'Asie du Sud-Est=UPAS)が1998年6月29日から7月11日までシンガポールで開催された。

本稿はこの研修を総括し、フランス語教育学における教員研修のなかに位置づけると共に、この研修が提起する課題を考察したい。

### 研修の位置づけと目的について

この夏期大学は、在シンガポールのフランス大使館文化部言語教育協力事務所(Bureau de coopération linguistique et éducative=BCLE)、ならびに東南アジア諸国連合教育相機構地域言語センター(Centre regional des langues=RELC/SEAMO)が主催したもので、1998年に六年目を迎えた事業である。まずこの研修の目的を明確にし、その特徴を明らかにするため、ここではポルシェによる教員研修の類型を取り上げたい。

ポルシェはフランス語教育における教員研修を四つに分類している。

- 1) 学習者の教室でのグループ活動やクラス見学などの評価を学ぶ研修。これは教員になるための初期研修にあたり、日本では主に大学在学中に教科教育法などの形で行われる。
- 2) 上記の研修で獲得した能力を高めるための再教育。
- 3) 初期研修の際に学習した言語学、社会学、心理学、文学など言語教育学に隣接する人文科学的知識の再教育。
- 4) 外国語としてのフランス語教育の実践に何らかの具体的な効果をもたらすテクノロジーの習得、これはとくに現在ではビデオ機器、あるいはマルチメディアなどの研修として行われる。

この類型に従えば、フランスのBELCやCAVILAM、かつてのCREDIFなどの主催した教員向け夏期研修は2, 3, 4をある程度効果的に総合したものである。また日本での研修に関すると、文部省、日本フランス語フランス文学会、フランス大使館の主催する志賀高原スタージュは3, 4の割合が比較的高いものであり、フランス語教育学会ならびにペダゴギーを考える会、フランス大使館が数年前より東京および関西で開催しているフランス語教育セミナーは1あるいは2, 4を中心にしたものである。このほかにも、再教育担当者 formateur を対象にした研修も存在するが、それはここで一般的な研修のカテゴリーに入らないので論じない。

ではUPASの研修をこの中のどこに位置づけることができるだろうか。UPASはある意味でフランス語教育の実践に直結した研修ではない。したがって、この類型では、3番目の人文科学的知識の再教育が一部あてはまるかもしれない。しかし、それはUPASのセミナーで取り扱われた主題との偶々の一致にすぎない。というのも、UPASは全体の統一テーマに「文化的アイデンティティ」を掲げており、すべてのセミナーはそのテーマに何らかの形で収斂するからだ。ところが、一般の教員研修において人文科学に関するセミナーは原則としてそれぞれ独立したものであり、全体が一つのテーマに統合されることは稀である。

そこでこの研修をポルシェの定めた類型に分類するのは難しいといえる。この研修はなによりも、言語（この場合はもちろんフランス語である）がコミュニケーションの道具であり、思想や知識、広い意味での文化を伝達し、さらには文化そのものを意味する、このような「哲学」の具体的実践である。従って、研修それ自体はなんらかの知識や技能の伝達や形成を目的とするのではなく、広い意味での人文主義的文化がフランス語文化を媒体として語られ、議論されることが目的となる。この点で、これまでのフランス語教育研修と大いに異なる。そしてこの事業をフランス政府の対外政策、すなわち文化外交の一環に位置づけたとき、この戦略はアジアというフランス語のプレゼンスがほぼ皆無に等しい環境の中で実に象徴的な価値を持つ。

フランス植民地帝国はその歴史において、現在のヴェトナム、ラオス、カンボジアを「インドシナ」へと変容させることにより、そこに何らかの「フランス」あるいはフランス語空間を創出しようと試みた。しかし、現在その三ヶ国がフランコフォニー機構に属し、1997年にはヴェトナムの首都ハノイでフランコフォニーサミットが開催されたにせよ、実質的なフランス語話者が極度に少ないのは周知の事実である。この現実を前に、フランス政府がアジアにおけるフランス語文化の底上げを願い、比較的少数のエリート主義的な集団を構築することにより、ある程度のプレゼンスを確保しようと試みた、このように UPAS を文化外交の文脈において解釈することができるだろう。

しかし UPAS はある点でそのような政治的思惑にとどまらない。この研修の特色は今やその多国籍の講師陣と参加者の創成する多元性にある。フランスで催される研修会において参加者は、世界各地のフランス語教師、および場合によっては世界各地で働いている、あるいはこれから働く予定のフランス人教師などであり、それに対し講師はほぼ全員といってよいほどフランス人である。これまでフランスにおいて参加したさまざまな研修において例外はごく稀であった。そこでは、「フランス人対非フランス人」というコミュニケーションの図式が成り立ちやすく、言い換えるならば、それは二国間的なコミュニケーションに還元される。これは参加者の国籍が多岐にわたっていても、知識の伝達のベクトルが「フランス人から非フランス人へ」と一方向のみを向いているためである。さらに、この知識の伝達を支配という観点から定式化し直せば、この図式はきわめて植民地主義的な構造に変質しやすい。つまり、多くの知識を持っている人間がそれを持っていない人間を「支配する構造」に陥りやすいのだ。というのも、フランス語教育を目的とした研修である以上、フランス語あるいはフランスに関することがらが研修の中心を占め、それは当然のことながらフランスのフランス語やフランス文化をモデルとし、フランス人の顕在的あるいは潜在的な能力が規範的なものになりやすいからである。

また言語のコミュニケーション戦略に照らし合わせると、母語としてのフランス語 (français langue maternelle = FLM) を使用する人間と、第二言語 (français langue seconde = FLS) あるいは外国語としてのフランス語 (français langue étrangère = FLE) を使用する人間との間に対等の関係はありえない。外国語によるコミュニケーションの本質として、その関係は望むと望まざるとにかかわらず、不平等が前提となることを認めよう。

このようにフランス語教育研修の、本質的に避けがたい、不平等とも言える構造において、ただ一つの例外がある。その研修は、日本で実施され、日本人講師とフランス人講師を交えて行われているフランス語教育セミナーである。この特質は、日本人講師とフランス人講師が研修生それぞれに対して「理論的に」対等であるとの前提に由来する。しかし、これは研修生がほぼ日本人に限定されている事情が可能にすることであり、その点では相変わらず二国間関係の枠内を脱することができないといえる。

UPAS の独自性はこの二国間の発想からの転換であり、その傾向は 1998 年より一層鮮明になった。1998 年の講師陣はフランス人八名、インドネシア人一名、台湾人一名、インド人一名、中国人一名、ベトナム人二名と、いわば多国籍軍を構成しており、そこではフランス人以外の講師もフランス人講師と対等の資格で参加し、議論は多国間協議を思わせるもので、まさに水平的国際交流の実践と言えよう。これは、1997 年まで UPAS が、ほぼフランス人講師のみを招き、アジア人を前にしてフランスないしヨーロッパの提起する問題をいわば「上からの」知識として講じていた状態と比べれば、まさにパラダイムの転換である。多国籍＝多文化の講師陣ならびに参加者がもたらした新たな知の拓きともいえる。と同時に、アジアに生起する「文化的アイデンティティ」という主題が、フランス人講師、アジア人講師および参加者の協同するコミュニケーション空間から支配・被支配の論理を止揚した、とも言えよう。

### 参加者並びに研修施設について

次に参加者の資格について述べたい。1998 年 UPAS の参加国はブルネイ (1)、インドネシア (3)、日本 (1)、マレーシア (2)、フィリピン (3)、中国 (3)、台湾 (2)、タイ (4)、ヴェトナム (2) であり、拡大 ASEAN の図式に近い。韓国については現在同様の研修を企画しているため、また経済危機のために参加を見合わせたようだ。またシンガポールについては、ヴァカンスの最中でもあり、シンガポール人が実利的問題により関心を抱く傾向もあつてか、参加を望めなかった。

これらの参加者は概ね大学の専任教員で、フランス語・フランス文学などを教授しており、大半はフランスないしフランス語圏で博士号を取得している。Alliance Française でフランス語を教授している者、あるいは大学等で歴史、哲学を教授している者もいたが、いずれもフランス等で学位などを取得している。このため、フランス語によるコミュニケーションに関してほとんど支障が生じなかった。これは、フランスで行われている BELC, CREDIF, CAVILAM などフランス語教育に直接従事する教員を対象とした研修会と比べた場合、かなりの違いが見られる。というのも、UPAS では高等教育に従事している教員が中心であるが、BELC 等の研修は初等、中等教育の関係者を含み、知的関心や問題意識がさまざまであるからだ。

参加者はすべてフランス政府の給費を受けており、台湾の参加者については、台仏大学間協力協定により台湾文部省が渡航費を負担し、フランス側が滞在費を負担している。またフィリピンからの参加者三名のうち二名は二回目の参加である。これは同国におけるフランス語教員が四十名弱と少ないことに起因しているようだ。なお、台湾人講師はロベール・シューマン基金の奨学金を得ている研究者で、留学中のロンドンからの渡航費用を自己負担した。

シンガポールでは BCLE の設置されている研修センター RELC International Hotel が宿舎 (二人部屋) として提供され、ビデオ映画の上映も含めてすべての研修は同研修所で行われた。朝食、昼食については付属のレストランを利用し、夕食については、研修初日に給費が支給され (260 シンガポールドル=23000 円相当)、徒歩十五分程度にある市中のレストランなどで自由に取ることができた。

### プログラムについて

これまでも言及したように、1997 年までの UPAS はどちらかといえば、ヨーロッパあるいはフランスの主導するテーマを取り扱ってきた。「フランスのイメージ」(1993)、「フランス

とヨーロッパ」(1994)、「知の共有」(1995)、「オリエントの欲求、西洋の魅惑」(1996)「現在と日常：現代社会における個人」(1997)。

それに対し、1998年のテーマ「文化的アイデンティティ」はヨーロッパで討議されているだけでなく、アジア各国もさまざまな次元で直面している課題である。このようにヨーロッパとアジアに通底する主題をシンガポールにおいて論ずることは実に象徴的である。というのもこの都市国家は文化的にも、また地政学的にも西洋と東洋の結節点に位置するからだ。

ところで、アイデンティティとりわけ文化的アイデンティティはなぜ現代社会の課題となるのだろうか。概して、アイデンティティが問題となるのは、それが何らかの形で脅かされ、その根拠が揺らぐときである。そしてアイデンティティはその確立が求められ、承認されることを求めるという点で、決して静態的な対象ではなく、ダイナミックな表象としてあらわれる。とりわけ、ある言語・文化グループがその承認を求めるとき、それはナショナル・アイデンティティと対峙することもあり、この対立構造はとりわけ自由主義社会における少数派の立場として表明される。しかし、アイデンティティ承認の力学は社会集団に関するだけでなく、個人のレベルでも作用する。たとえば、それは外国語学習のプロセスにおいて学習者のアイデンティティが他者としての外国語に直面することによってもあらわされている。

さて UPAS 全体のプログラムは三つのサブテーマに区分されている。第一期「文化的アイデンティティの政治」*Politiques de l'identité culturelle*では、アジア諸国(シンガポール、台湾、インドネシア、ヴェトナム)のナショナル・アイデンティティの形成を歴史的、社会的、政治的、さらに文化的視点から具体的に考察した。第二期「異文化理解：言語と文学」*Interculturel : langue et littérature*では異文化理解を目指した言語教育と文学の問題を取り扱った。第三期「アイデンティティの問題」*Problématique de l'identité*、アイデンティティの問題をさらに抽象的次元へと引き上げ、哲学的・文化人類学的観点から、また文学的想像力の世界におけるテーマとして考究した。この一連の流れは、議論を具体から抽象へと導くもので、参加者の問題意識を覚醒させるとともに、それを統合するうえで大いに役立った。

ここで、講師別に講義の概略を示したい。

Jean-Louis Margolin (Maître de conférence en histoire contemporaine à l'Université de Provence)はシンガポールの地域研究者として、国家としてのシンガポールの形成を歴史的視座から論じ、西洋と東洋の結節点に位置するシンガポールの特殊性を明らかにした。中でも、シンガポールの上級相リー・クワン・ユウの提唱するアジア主義が、アジアから他国へ向けて発信すべき普遍性を備えたものかどうか、批判的分析を行った。西洋発の普遍主義から見た場合、アジア主義は伝統と近代性を和解させる要素はあるものの、政権の権力イデオロギーを正当化する装置とも映る。

Jean-Pierre Cabestan (Directeur de recherche au CNRS, directeur de l'antenne de Taipei du Centre d'études françaises sur la Chine contemporaine)は中国並びに台湾の政治・地域研究者として、両国の文化的・政治的アイデンティティの多義性の解明を試み、台湾人のアイデンティティの形成を歴史的観点から展望した。台湾人の文化的アイデンティティとナショナル・アイデンティティの「ずれ」を論ずることは、現代世界におけるアイデンティティの探求に関して重要である。というのも、台湾は歴史的に鑑みて中国とおおかたの文化的アイデンティティを共有している。ところが、政治体制の相違が台湾に独自のナショナル・アイデンティティを作りつつあり、それは文化的アイデンティティと必ずしも一致しない。これは西

洋の植民地主義の結果、国境線が民族集団と無関係に分断されてしまったアジア・アフリカ諸国の現実に共通しているのではないか。この意味で、台湾人の独自のアイデンティティを模索する運動は他の共同体にとっても示唆的である。

中国の社会言語学者 Zheng Li Hua (Directeur du département de français à l'Université des Langues Etrangères du Guangdong) は中国語に見られる「面子」をめぐる表現を社会的文脈から分析し、中国人のアイデンティティの形成において「面子」の占める重要性を強調した。とは言え、いくつかの表現は明らかに日本人も含めた他のアジア人の言語実践にも共通するもので、どのような基準によって中国性を解明するのかという方法論的次元の疑問も残った。

続いて、インドネシアの哲学者 Haryatmoko (Professeur d'éthique sociale et d'histoire de la pensée moderne et contemporaine de la Faculté des Lettres et de la Culture à l'Université de Jakarta) はインドネシアを襲っている経済危機、並びにそれがひきおこしたインドネシア人華僑への迫害状況の解決を倫理的次元から探求し、多元的宗教観の原理としての他者性のうちに解決の原理を認めるよう提唱した。華僑への迫害は日本ではあまり報道されなかったが、実状はかなり根深い問題を含んでいる。東南アジアの多くの国のように、インドネシアにおいても華僑は経済の流通の要所を実効的に支配し、経済危機が訪れるごとに迫害の標的になっている。しかし、それは経済的支配に対する報復の意味合いだけではなく、宗教的要素も無視できない。インドネシアは国民の 87% がムスリムだが、それに対し華僑のほとんどはキリスト教徒か仏教徒であり、華僑への迫害は少数派の宗教への排斥や迫害をも意味しかねない。そのような宗教的・倫理的寛容の乏しさを打開する方策として Haryatmoko は、宗教・倫理の訴える真理そのものに多元性を要求し、その上で多元的な宗教観に基づく他者の尊重を求める。

ヴェトナムの歴史家 Cao Xuan Pho (Historien à l'Institut de l'Asie du Sud-Est de Hanoi) はヴェトナム人のアイデンティティの形成を国家の継続的發展と地政学的要因に位置づける。分析は、アジア経済交易史における東シナ海の役割、仏教的価値観の実現の場としての家族、仏教、儒教および道教の影響、中国やフランスの間接的、直接的支配、半世紀に及ぶ戦争の歴史の中から立ち上がる社会を中心に行われた。今後の課題は、近代化の推進と伝統的文化の統合と、これと平行して市場経済の導入といえる。

ここまでの議論はアジアの問題に終始していたが、台湾の政治史研究者 Su Hungdah (Maitre de conférence à l'Institut des études européennes de l'Université Fu Kuang) はアジア人の眼差しから欧州統合の歴史を取り上げた。Su は、欧州連合の起源を中世のローマ帝国に遡り、統合されたヨーロッパ像としてのアメリカ、両大戦を経て Monnet や De Gaulle の構想を論じ、現代に到る経緯を通観した。ヨーロッパ統合の歴史をたどることは、一方でアジアではなぜ統合が進みにくいのかを考えさせる契機ともなった。アジアでは政治体制、経済水準、宗教・イデオロギーの多様性に加えて、過去の歴史において日本の推進した「大東亜共栄圏構想」の残した傷跡が完全に払拭されたわけではない。過去の歴史の教訓を生かした新たな統合構想が望まれる。

第二期では、現在シンガポール大学にてフランス語・フランス文学を講じるインド人研究者 Srilata Ravi (Professeur de français et de littérature dans le programme d'études européennes à l'Université nationale de Singapour) はフランス文学におけるインドの表象

を分析し、その女性化されたエクゾティズムの価値を論じた。これはサイドが『オリエンタリズム』において批判した問題系に属するもので、インドに対するフランス人のステレオタイプを解明し、エクゾティズムの持つ支配構造を現代小説の中に分析した。これはポストコロニアルな研究に位置するが、Ravi は自分自身がヒンドゥー教のバラモン階級に属しているながら、キリスト教学校で英語による教育を受け、現在シンガポールで働いているという、いわばアイデンティティの「ねじれ」が、インド人の文化的アイデンティティの表象の研究を推進した動機だと述べた。ポストコロニアルな研究が知的好奇心だけからではなく、研究者自身のアイデンティティの探求と切り放しがたく結びついている好例である。

一方、香港バプティスト大学でヨーロッパ研究科のコース設定を担当している Marie-Christine St Denny (Professeur dans le programme d'études européennes à l'Université Baptiste de Hong Kong) はフランスでの実務研修を大学のコースに統合するに当たっての問題点や学習者の異文化体験の問題を実例を交えて報告した。香港バプティスト大学は、フランス語学習を卒業後の就職に直結させるため、フランスでの実務研修をカリキュラムに導入した。これは同大学のドイツ語コースと共同の計画であったが、フランスで受け入れ先を探すことはドイツに比べて非常に難しく、今後は非営利組織である association などへの転換も視野に入れているようだ。初年度に実施した研修ではその期間中に、受け入れ態勢の不備などから研修生に否定的なカルチャーショックを生じさせた。ところが、その研修が帰国後には学生から最も高い評価を受けたことから、カルチャーショックの抱える問題の複雑さを考える機会ともなった。またインターネットの発展にともない、カルチャーショックによる異文化理解の機会が減少するのではとの懸念も漏らされた。というのも、これまでは学習者本人が解決しなかったならなかった問題を、現在ではインターネットの利便性により、教師などに簡単に解決を求めることができるからだ。そのため、物理的には外国に滞在しているにもかかわらず、心理的には自国にいるのとかかわらない状態が生まれかねない。

第三期では、哲学者の Alain Renaut (Professeur et directeur de l'UFR de philosophie à l'Université Paris IV) が多文化主義と承認をめぐる政治の考察の中から生じる課題としてのアイデンティティの問題を取り上げた。アイデンティティとはそれを主張することにより成立するだけでなく、他者による承認によって決定されるものである。また、本来的自己のアイデンティティが他者に承認されず、他者が一方的にアイデンティティを決定した時でも、他者の定めたアイデンティティは、他者が多数派を構成するときには、たとえそれが望ましいものではなくとも、自己の存在や意識、アイデンティティを規定することもある。このようにアイデンティティと承認の政治力学は分かちがたい。

ところでアイデンティティの承認をめぐる問いは、北米の多文化社会から生まれ、これはその後、自由主義社会における人間の尊厳の平等性と、それまで普遍主義的人間観のもとに承認されることの少なかった個人や共同体の差異性の対立として表明された。個人がそれぞれの特性において、つまり個人のアイデンティティの差異を個人の保全性を保証するものとして承認する一方で、すべての人間の尊厳を平等に考える普遍主義はどのように両立しうるか、問題はこの対立構造にある。この対立を止揚する方策として、Renaut は「空虚なる普遍主義」を提案する。これは、わかりやすい比喻を用いれば、親子の関係に比較できる。子供は親から生まれ、親と子は人間として差異はなく、尊厳において平等である。しかし、子はあらゆる点で親と区別される。これは普遍主義と差異性の尊重の両立となる。言い換えれば、他者を文化や人種などに基づく差異性に還元せず、第二の自分自身 alter ego と考えることを目指すことにより、他者をそ

の他者性により承認することができる。これにより互いの承認は差異性も含めると同時に、平等の原理も尊重することができる。

この議論は、政治、哲学、歴史、教育など、知の多くの領域にかかわる。わたしにとって非常に興味深かったのは、この承認の政治と、多言語主義を標榜しながらも多文化主義を認めないフランスの普遍主義の関係である。言語の領域において他者の個別性を承認する一方で、言語を含みながらも、それにとどまらない文化の領域で同化主義的で統合型の普遍主義を説くことは可能なのだろうか。ここには明らかに「ねじれ」があるのではないか。

さらに外国語教育の場において、差異性の承認は何を意味するのだろうか。フランス社会の事実上の多文化性を認めずに、規範化された文化のみをフランスを代表する最も価値のあるものとして示すことなのか。それとも、文化の多様性を積極的に承認し、これまで抑圧されてきた少数者(アラブ人移民、地域文化など)の文化をも多数者の文化と同じ価値を持つものとして語ることなのか、これは問いかけるわれわれ自身が自文化に対してどのような認識を持っているかをも問うものである。

つぎに、中国を主な研究対象とする文化人類学者の Joël Thoraval (Maître de conférence à l'École des Hautes Etudes en Sciences Sociales et Directeur de Centre de recherche sur la Chine contemporaine)は中国人のナショナル・アイデンティティと文化的アイデンティティの形成を歴史的視座から検討した。中国人のアイデンティティは何よりも文化的伝統の実践の程度に基づくものであり、また伝統的社会観における家系の重要性も強調された。しかし、このような文化的アイデンティティを生きる中国人と、世界各地で活躍する「中国人」としての華僑をどのように区別すべきか、華僑を文化的には中国人であるが、政治的には外国人であると断言できるのか、そこにはアイデンティティ理解の難しさがある。

作家の Olivier Rolin は作家の言語、文学としての異文化体験を Michaux や Segalen を援用しつつ、講義それ自体を文学的イマジネールへと変容させた。

言語担当アタッシェ Daniel Baillon (attaché linguistique au Consulat Général de France à Shanghai)は現代美術、現代詩、ジャズといった文化を他者との出会いに開かれた行為として提示した。とくにルヴェルディの詩句の分析を通じて、詩的アイデンティティの構築と世界へのひらきを論じた件は実に興味深かった。

中国学者の Philippe Bardol (responsable du centre de documentation sur la France, Consulat Général de France à Shanghai)は中国五世紀の仏教説話の一つ「地獄下り」を取り上げ、その文学的修辞の分析を通じて仏教的アイデンティティの解明に努めた。Bardol が取り上げた仏教説話は、おそらく日本の『今昔物語』などの説話文学に共通する。インドを発祥の地とする仏教が中国の民衆文化に根付き、フランス人がそれを考察するプロセスはそれ自体異文化理解の局面をあらわしている。

一連の講義の最後には、ヴェトナムの歴史家 Bui Tran Phuong (Directrice de l'École Lotus)が、十九世紀の西欧列強による植民地支配を目前にしたヴェトナム人知識人の態度を論じた。西洋による植民地主義の力に脅威を感じると同時に、またその近代性に魅了され、ナショナル・アイデンティティを保持し、文化を維持することができるのか、この難問に対する開明的態度を貫いた一知識人の苦悩をたどり、その知的道程を反省することは歴史的考察にとどまら

ない。むしろ過去の歴史を現在どのように活かすことができるのか、その具体的回答であると言えよう。

以上が講義の概要であるが、その詳細は後日シンガポール BCLE の発行する報告書を参照されたい。

## 文化活動について

一連のセミナー、討論を補完する観点から「交差する眼差し」と題し、ARTE（フランス・ドイツのテレビ局）の制作したアジア諸国に関連するドキュメンタリー映画を見た。ここにそのタイトルと梗概を記したい。

*Bali : les couleurs du divin* (バリの民族音楽ガムランの演奏家とその社会をめぐるドキュメンタリー)

*Cheng Tcheng* (詩人・言語学者・革命家にして、Gide や Valéry と交友のあった一人の中国人の証言と回顧録)

*Berau : sur les traces de Conrad* (イギリス人小説家 Conrad の足跡を求めてボルネオの旧イギリス領商館をたずね、その小説の舞台やボルネオに暮らす人々を描いたドキュメンタリー)

*Point de départ* (ヴェトナム戦争の最中に、反戦主義者のアメリカ人グループとハノイを訪れ、映画を撮影した監督が、それから二十数年後に再びハノイを訪れ、かつて出会ったヴェトナム人らと再会を果たす。直接に戦火を交えた国へ向けるアメリカ人の眼差しを映し出すフランス人の眼差し。)

*L'École de l'Asie* (1898年に設立された、ヴェトナム、カンボジア、ラオス、タイ、インド、日◆(などの芸術を調査研究するフランス極東学院の沿革と現在。)

これらの映画の多くは、当然のことながら、フランス人が向けたアジアへの眼差しの表象に他ならず、その意味でサイドの告発したオリエンタリズムの定式を踏襲しているのでは、との批判も参加者からわきおこった。エキゾティズムという支配、観る主体としての眼差しなど、これらの映画にはオリエンタリズムの特徴を見逃すことはできない。しかし、翻って考えると、日本人の諸外国、とりわけ「南の国」へ向ける映像文化を媒介とした眼差しは、支配・被支配の構造から自由になっているのだろうか。「南の国」を題材とする映像メディアは近年ますます商品化し、対象となる文化に対して自文化へ向けるものを同じ眼差しを向けているのだろうか。たとえば、近年のグルメ・ブームの中での「食材としての南の国」を取り上げる際に、その土地に暮らす人間の生活をどの程度考慮に入れ、人間としての尊厳を認めているのか。あるいは、フランス人がオリエントへ向ける眼差しを、オリエントの内部において「オリエンタル」である日本人自身が再生産しているにすぎないのか。それともオリエンタリズムという眼差しの構造を克服することをめざしているのか。このような反省は、フランス人のオリエンタリズムが、日本人の内に潜むオリエンタリズムを照射した結果生まれたものである。この意味では、これらフランス映画の上映が有益だったとすれば、参加者それぞれが自文化の他文化へ向ける眼差しに再考を迫ることができたからだと言える。

この他にも、文化活動として第一週目の週末には半日の市内観光が実施された。残念なことに、これはごく一般的な観光に終始しており、セミナーにおいてシンガポールを社会的、政治的、歴史的に綿密に考察しただけに、それに対応した観光、あるいは官公庁の視察等が実施されなかったのは残念だった。



第二週目にはフレンチ・ビジネス・センターにてカクテルパーティが催され、シンガポール人元フランス政府給費生との交流も企画された。しかし、ホスト国のシンガポール人の参加が少なく、あまり交流を持てなかったことは残念である。このような文化事業に対するシンガポール人の関心の低さは、その国民性の一部を知る上で興味深い。シンガポール人は、文化という短期的には利益を生むことの難しいことがらにあまり関心を示さず、より実利的な精神を生活しているのだろうか。その実利主義的思考の一端はフランス政府給費留学生の修学分野の分布にも顕著にあらわれているようだ。ここでは日本とは逆に、フランス語・フランス文学の専門家はきわめて少なく、エンジニア等技術系の留学生や経済や経営など実利的な学問を修めた人材が目立つ。

この一連のセミナーを通じて得た最大の収穫は何よりもその知的刺激である。二週間という比較的長期にわたり、連日朝の九時三十分から夕方六時頃まで講義と討論を重ねたことで大いに知的充実感を味わうことができた。しかも、これまでの研修と比べて大幅に異なる点は、フランス語でアジアの現在の問題を論じるという態度である。これまでのフランスなどの研修では、議論の中心はフランスやフランス語であり、ある意味でそれらは、わたしの文化的アイデンティティの外部に位置するものだ。ところが、アジアという地域の問題を論ずるに際しては、たとえ日本が中心テーマになっていなくとも、日本のプレゼンスを無視することはできない。この点では、日本からの唯一の参加者として、日本に関する疑問等に答える責任を痛感し、文化的アイデンティティそのものの根源に振り返ることとなった。アジア人相互の議論は、過去、現在ともさまざまなレベルの利害が錯綜しているだけに容易ではない。フランスやフランス語に関する議論は自分の文化的アイデンティティに抵触することが少ないだけに心理的抵抗は少ない。しかし、世界の他の地域、たとえばアフリカなどでは生活環境がフランスの利害と交差しており、その点で彼らがフランスやフランス語に関して議論をするならば、それは彼らの文化的アイデンティティに抵触する。これはアジア人相互で互いの利害の関連する地域の問題を論ずることとパラレルな関係にある。言い換えるならば、フランス語で地域の問題を論ずることは、フランス語がアジアにおいて、トピックとしての文化ではなく、さまざまな利害の衝突からなる現実政治をも含む得る文化への変貌の第一歩だといえるだろうし、フランス語がそれぞれの文化的アイデンティティの一部へと統合を始めた契機とも言える。このような意味でのフランス語がアジアの文化空間に根付くのか否かは、フランス政府の思惑だけでなく、参加者一人一人の双肩にかかっているといわねばならない。

最後に、もし将来に日本で同種の事業を企画することになれば、どのような問題が生じうるのか、それをいくつか整理し、日本におけるフランス語教育学への提言に代えたい。

日本で UPAS のような研修を開く意義は非常に深いだろう。というのも、これまでに述べたように、UPAS ではフランス語を「対象化」するのではなく、文字通り「コミュニケーションの道具」として使用するからである。フランス語が生活環境に全く存在しないアジア各国、とりわけ日本人フランス語教員にとって、UPAS のような研修は「コミュニケーションの道具」としてのフランス語という側面を改めて自覚させ、フランス語の価値を再発見することにつながる。

一般に、日本をはじめとするアジア諸国において、フランス語教員の多くはフランス語をフランスないしヨーロッパとの関連において考えると、対フランス人という観点からフランス語によるコミュニケーション戦略をとらえている。これを FLM vs FLS・FLE という図式で定式化するならば、FLS・FLE の立場にいる者は FLM の話者に対して何らかの「言語使用に関する不安」*insécurité linguistique* を感ぜざるを得ない。つまり、絶えず先生を前にして、自分の言語実

践が正統的であるか、不安を感じる。このような要素を考慮に入れると、アジア諸国の教員間でのフランス語による交流はたがいに外国語使用者として同じ立場にあることから、双方にとって「言語使用に関する不安」がより少なく、またコミュニケーション戦略や国際交流の双務性という観点から見ても、より理想的なコミュニケーションに近づくのではないか。もちろん、この場合は、話者が自文化の言語実践をフランス語に投射しやすいため、フランス語の使用にフランス語以外の文化的要素が介入することは避けがたい。

しかし実施にあたっては望ましい要素が多いとはいえ、いくつかの困難な問題もある。この種の研修の成否に決定するのはテーマの選択である。というのも、アジア人参加者が関心を持つテーマを選ぶと同時に、フランス人およびアジア人講師の関心をも引きつけなければならないからである。それにはいくつかの条件がある。

- 1) FLE の教員の関心を引くと同時に、FLE の領域にとどまらないもの。
- 2) 各国の伝統、文化、政治等を尊重したもの。
- 3) 具体的課題から抽象的次元までカバーしうるもの。
- 4) 地域の課題に何らかのかたちで関与するもの。

以上の条件を満たしうるテーマを発見できれば、この事業は半ば成功したと言えよう。なお二番目の問題に関して、アジア諸国は宗教、イデオロギー、政治体制など多様性に富んでいるので、講師並びに参加者が忌憚なく議論し、交流を深めるためには、文化的差異を慎重に検討しなければならない。というのも、ある国では議論が可能であっても、他国ではタブーであるテーマも考え得るからだ。

第二に、日本側参加者の選抜に関して、志賀高原のような外国語運用能力の養成の要素は皆無で、参加者に幅広い分野での口頭言語能力が強く求められるだけに、幅広い視点からの参加者の選抜が望ましいだろう。これは他の研修会との整合性や経費の問題とも併せて検討することが望まれる。

第三には、過去の歴史認識に関する問題を忘れてはならない。アジアからの参加者を招き、フランスやヨーロッパの問題だけではなく、アジアの問題をも論じるにあたっては、アジア諸国、とりわけ中国、韓国からの参加者が植民地支配、あるいは日中戦争の問題に触れないとは考えにくい。この歴史観をめぐる問題は、日本側にも一定の政治的・社会的合意がないだけに、日本側はその対話に充分誠意を持ってあたることが望ましい。しかし、日本語でもなく、参加者の母語でもなく、第三者の言語であるフランス語で議論を行うことは感情的な議論の突出をある程度押さえ、客観的な言説を建設的に構築する上で大いに役立つと思われる。そのような議論は大所高所から判断すれば、国際社会における日本の信頼の醸造に寄与することになるだろうし、日本政府が何らかの形でこのような事業に関与するのであれば、アジア諸国に対する信頼醸造装置としての研修の役割を強調する必要があるだろう。

**資料** : Programme : Université d'été francophone des pays d'Asie du Sud-Est  
**Politiques de l'identité culturelle**

lundi 29 juin, Jean-Louis Margolin : La construction de l'identité nationale singapourienne.

fmardi 30 juin, Jean-Pierre Cabestan : La formation historique et les ambiguïté de l'identité taiwanaise.

Zheng Li Hua : Jeux de face en Chine

1er juillet, Jean-Louis Margolin : Le débat sur les valeurs asiatiques ; de Singapour au monde

Jean-Pierre Cabestan : Le rôle des identités culturelles dans les relations entre la Chine populaire et Taiwan

2 juillet, Johannes Haryamoko : L'altérité : fondement du pluralisme d'éthique et de religion en Indonésie

Cao Xuan Pho : L'identité culturelle dans le développement actuel du Vietnam

Table ronde ; Jean-Louis Margolin, Jean-Pierre Cabestan, Hungdah Su, Johannes Haryamoko : Identités culturelles, pluriculturalisme et politique dans les pays de la région

3 juillet, Hungdah Su : La recherche d'une identité commune et l'unification européenne

### **Interculturel : langue et littérature**

3 juillet, Srilata Ravi : L'espace exotique : l'Asie dans l'imaginaire français

6 juillet, Atelier ; Srilata Ravi, Marie-Christine St Denny : Les programmes d'études européennes en Singapour et Hong Kong : langues, cultures et identité européenne (comparaison)

Marie-Christine St Denny : L'interculturel et l'apprentissage des langues

### **Problématiques de l'identité**

Alain Renaut : Alter ego. Les paradoxes modernes de l'identité

Joël Thoravel : Identité nationale et identité culturelle

8 juillet, Alain Renaut : Une politique de la différence est-elle possible ?

Table ronde ; Alain Renaut, Joël Thoravel : L'universalisme est-il universel ?

le 9 juillet, Joël Thoravel : Lien entre l'identité et l'ethnicité

Olivier Rolin : Les langues de l'écrivain

le 10 juillet, Daniel Baillon : Identité en face à face

Philippe Bardol : La problématique de l'identité dans le bouddhisme chinois : un exemple, « Zhao Tai visite les enfers »

Olivier Rolin : Ecrire d'ailleurs

Bui Tran Phuong : Préservation de l'identité nationale du point de vue vietnamien du 19e siècle.

注1 これまでも UPAS に関する報告は *Le Français dans le monde* に何回か掲載されている。cf. n. 264, avril, 1994 ; n. 269, novembre-décembre 1994 ; n. 276, octobre 1995 ; n. 286, janvier 1997.

注2, PORCHER Louis, « Formation et filières de formation en français langue étrangères », in *La didactique des langues face à face*, Paris : Hatier / CREDIF, 1988, p. 127 cf. p. 91.

注3, これについては拙論参照、「Nouvelles tendances de la didactique du FLE ; compte rendu du stage annuel du CREDIF », 『明治大学大学院文学研究論集』、第4号、1996, pp. 85-103.

注4, 文化外交については拙論参照。「文化外交の黎明期に関する考察」、*L'ARCHE*, VIII, 1997, pp. 141-151.

注 5, 三国の実質的フランス語話者の人口に対する割合は、ヴェトナム 0.6%、カンボジア 0.5%、ラオス 0.2%と、実質的には「フランス語圏」を標榜するには難しい。

注 6, 唯一の例外として1995年のラ・ロッシュェルにおける CREDIF 最後の夏期研修会において言語心理学ならびにハンガリー語を担当した Alfred Knapp 氏をあげることができる。彼はオーストリア人であったが、フランスの国立科学研究所(CNRS)の研究者で、ハンガリー語という特殊言語を担当するために講義を担当したようだ。

注 7, BESSE Henri, 《 Eduquer la perception interculturelle 》, in *Le Français dans le monde*, n.188, 1984, pp. 46-50.

注 8, この転換は言語教育担当アタッシェの交替によるのかもしれない。新任のアタッシェはポリネシア出身のフランス人であり、その多言語・多文化的生活環境がこの多元性への転換を可能にしたのだろうか。

注 9, ( ) の中は参加人数。なお、マレーシアについては Alliance Française で働くフランス人が、ブルネイはインターナショナル・スクールで働くイギリス人が参加した。

注 10, シンガポールの言語文化、社会に関しては次の研究が参考になる。大原始子、『シンガポールの言葉と社会：多言語社会における言語政策』、東京：三元社、1997、198p。

注 11, アイデンティティの承認をめぐる問題に関する基本文献は次の論文集である。TAYLER Charles, WOLF Susan, ROCKEFELLER Steven, alii, *Multiculturalisme : Examining of the Politics of Recognition*, Princeton University Press, 1994、(佐々木毅、辻康夫、向山恭一訳、『マルチカルチュアリスム』、東京：岩波書店、1997 (3)、240 + 3 p)。

注 12, cf. Zheng Li Hua, *Les Chinois de Paris et leurs jeux de face*, Paris : L'Harmattan, 1995, 304 p.

注 13, SAID Edward W., *Orientalisme*, New York : Groeges Borchardt, 1978 (板垣雄三・杉田英明 (監修) 『オリエンタリズム』 上、下、東京：平凡社、1997 (7) ◆A456 p + 474 p、平凡社ライブラリー)。

注 14, insécurité linguistique に関しては、次の研究を参照。CUQ Jean-Pierre, *Le français langue seconde : origine d'une notion et implications didactiques*, Paris : Hachette, 1991, 224 p, cf. p. 74.